

## 24. ヒノキカワモグリガ防除試験 ヒノキの中齢級における材内被害

土屋 大二

### 〔目的〕

スギ、ヒノキの穿孔性害虫であるヒノキカワモグリガの被害は、幹や枝の付け根等の内樹皮を食害することにより材内に褐色痕が生じ、材価を著しく低下させるため、その防除技術の確立が急務となっている。本種の被害はスギに多いため、スギ林での調査が中心であった。ここでは、ヒノキ林を対象に過去に生じた被害の解析を行った。

### 〔方法〕

調査は、八王子市川口地区のヒノキ林より4本を伐採し、50cmに玉切った後割材した。割材は、放射状になるべく細くなるよに割った。割材後ヒノキの断面に現れる食痕より、高さ測定と発生年の年輪を読みとった。

### 〔結果〕

伐採したヒノキ林は、北側斜面で約0.3haの小さな林分である。下方はスギ林、上方は雑木林で囲まれている。調査結果を表-1に示す。樹高は平均13.5m、胸高直径は平均12.2cmと伸長生長が良かった。割材により生じた食痕が、節（枝）が関係して生じたものか、節と関係なく幹表面に生じたものかを調査した。その結果、幹と節との関係をみると、幹80%、節で20%と幹の方が多結果となった。食痕が出現した部位は、地上高8cmから最高で13.90mであり、3mから5mの範囲に多くみられた。

ヒノキカワモグリガで生じた食痕部の垂直分布を図-1に示す。1本当たりの食痕数は約6箇所であった。食痕の分布は、上層部に分布するタイプ（No.4）と、傾向のみられないタイプ（No.1, 3）があった。食痕の現れ方は、年齢にそって茶褐色紋が生じ、その大きさは様々であった。樹幹表面と材内食痕の関係をみると、表面では食痕と思われる箇所があるが、材内には痕跡がないケースが多くあった。スギでは、幹表面のコブ状隆起等により判定できるが、ヒノキの中齢級では幹表面からの判定は困難であった。

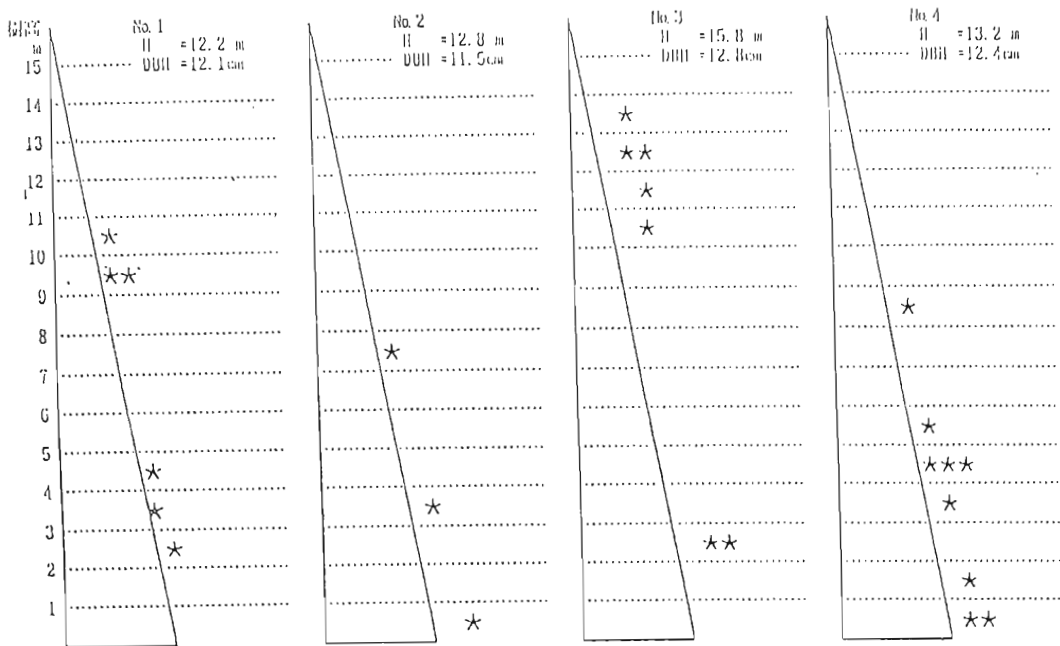
割材後、ヒノキの断面に現れる食痕から、加害年の推定を行った（図-2）。最初に生じたのは6年生で、最終では30年生であった。加害年が多くみられた樹齢は、14年生から23年生であった。

なお、ヒノキカワモグリガ以外の材内被害として、昭和61年にあった冠雪害の時に生じたキズが残されていた。その症状は、縦方向では年輪の間にスキ間が生じ、年輪間では茶褐色の紋が生じていた。

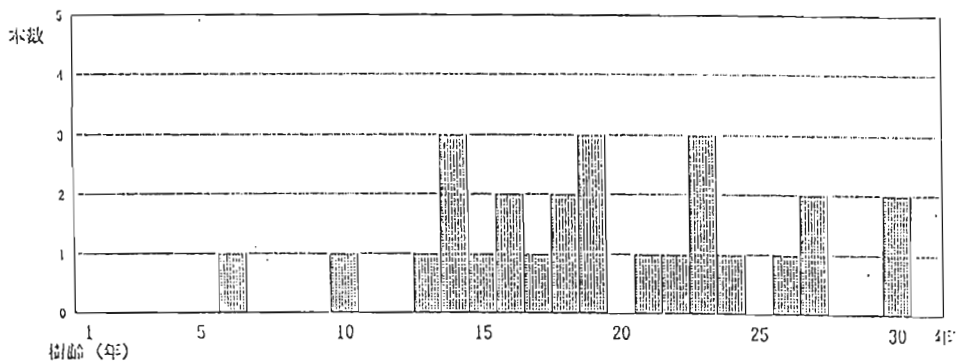
表— 1 間伐跡の調査結果

No	樹高 m	DBH cm	樹 高 (m)														
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1	12.2	12.1	幹	13		10	19				23		23	27			
			枝														
2	12.8	11.5	幹														
			枝	27			30			30							
3	15.8	12.8	幹		14									17	22	24	
			枝										26				
4	13.2	12.4	幹	18	6	19	16	11			17						
			枝				14										

※ 数字は世定年を表す



図— 1 食痕跡の分布



図— 2 木口年輪の世定年